

第12課 諸国民の願い

【暗唱聖句】

イザヤ 60:3 「国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む」

【日曜日・罪の結果】

「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。むしろお前たちの悪が神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」 59:1,2

神様が祈りに答えて下さらないのは、その力がないからではなく、祈りが聞こえないからでもない。民の罪が神様を隔てているのだと語られています。罪がもたらす結果とは、神様と人との間に大きな隔たりが生まれさせてしまうことなのです。神様が人から離れるのではなく、人が神様を遠ざけてしまうのです。

イザヤ書 59 章には 3 種類の罪が描かれている。「罪」と訳される「ハッタート（ギリシア語のハマルティア）「的をはずすこと」を意味している。神から離れた人間は、何をしても結局は「的を外した」人生となるということ。「悪」「不義」「咎」と訳される「アーヴォーン」、そして、「神にそむく、争う（「御前に、わたしたちの責の罪は重く」（59:12））」と訳されている「ペシヤ」。

「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると…」 創世記 3:8

創世記 3:8 に、人間が初めて罪を犯したあと、神様が園を歩く足音が聞こえたとき、人は神様の顔を避けて、木の間に隠れました。これが罪の結果なのです。神様が恐ろしい存在となり、神様から隠れるようになったのです。これは罪を犯す前にはあり得ないことでした。罪は神様との平和な関係を破壊するものなのです。

【月曜日・誰が赦されるのか】

イザヤ 59:16 「主は人ひとりいないのを見、執り成す人がいないのを驚かれた。主の救いは主の御腕により、主を支えるのは主の恵みの御業」

罪が神様と人とを隔ててしまいました。イザヤ 59:16 で描かれているのは、この問題を解決するために、神様に執り成すことができる者は誰一人いないので、主自ら救いの御腕を伸ばすことを決められたということです。

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません」 ローマ 3:21、22

私たちは誰でも、イエス様を信じることによって神様の義が与えられ救われる。そこには一切差別はないと書かれています。また、ローマ 3:20 では、「律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです」とも書かれています。なぜ、行いによってだれ一人救われないのかといえば、それは誰一人罪を完全に克服することができないからです。僅かな罪も赦されないのです。律法が示されたのは、罪の自覚を生じさせるためです。それは罪とは何かということを示すと共に、イエス様のもとに私たちが行くためです。

【火曜日・普遍的な訴え】

イザヤ 60:1、2 「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を

覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる」

約束された救い主がついにやって来られます。闇の中に光は昇り、主の栄光が輝きます。それゆえ主は私たちに、「起きよ」そして「光を放て」と言われます。この描写は、10人のおとめのたとえ話を連想させます。

「真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた」マタイによる福音書 25 章 6、7 節

イエス様は、「あなたがたは世の光である」（マタイ 5 章 14 節）といわれました。また、エフェソ 5:8 では、「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい」と教えられています。求められていることは、しっかりと主と結ばれ、光の子として歩むことです。

イザヤ 60:3 「国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射し出でその輝きに向かって歩む。目を上げて、見渡すがよい。みな集い、あなたのもとに来る。息子たちは遠くから娘たちは抱かれて、進んで来る。そのとき、あなたは恐れつつも喜びに輝き、おののきつつも心は晴れやかになる…」イザヤ 60 : 3~5

これはエルサレムにイスラエルの民たちが続々帰還することを預言しているわけですが、同時に再臨直前の大リバイバルを予感させます。

【水曜日・主の恵みの年】

イザヤ 61:1 「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために」

イザヤ書 61:1 で再びイエス様のことが描写されています。「わたし」とは、イエス様のことですが、その特徴である油が注がている、つまりメシアであること、神様の霊が臨んでいること、良い知らせを告げ、自由と解放を告げる働きをすると預言されています。イエス様は会堂でこのイザヤ 61 章 1, 2 節を読まれた後、こう言われました。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ 4:21）。

「主が恵みをお与えになる年…」(61:2)。イエス様が来られるときを、「主が恵みをお与えになる年」と表現されています。イエス様が貧しい人々に自由と解放を告げる時、それは神様の恵みの特別な時となるのです。主の恵みの年といえば、ヨベルの年を連想させます。レビ記 25:10 「この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする」と書かれてありますが、50 年目に奴隷は解放され、手放した土地が返され、先祖伝来の地に帰えることができるとの教えです。これが、実際に行われたことはほとんどなかったようですが、イエス様が来られるとき、まさにこれが起こるのです。

【木曜日・「神の報復の日」】

イザヤ 61:2 の預言は、主の恵みの年だけでなく、「…わたしたちの神が報復される日を告知して…」(イザヤ 61:2) と、神様の報復についても語られています。しかし、イエス様は「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ 4:21）と言われた時、あえてこの神様の報復の言葉を省略して朗読されました。これは実現する時が違うからでしょう。神様の報復は、一見神様の恵みと矛盾するような表現ですが、罪の裁きは神様の公平さを現わします。恵みの時のうちに、私たちは悔い改めなければなりません。また、神様の報復の日は再臨のときでもありますので、救われるものたちはみな永遠の御国に向かいます。ゆえに、やはり恵みのとき、しかも最大の恵みのときとなるのです。